2021年度

群馬大学共同教育学部　学部・附属学校連携室

教員養成 FD 活動推進委員会

報 告 書

2022年３月

目次

Ⅰ．FD 活動推進委員会の活動 2
1．今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的な FD 活動の推進 2
2．学部・附属学校連携推進室　教員養成 FD 活動推進委員会の構成 4
3．2021 年度事業計画 4
（1）学部教員への案内 4
（2）対象事業 5
（3）FD 参加登録および FD 発表登録 5
（4）FD 参加報告様式(1～3) 7

Ⅱ．事業報告 10
1．　附属学校園・公開研究会 10
2．　教育実習 A，C，D および幼稚園教育実習 14
3．　附属小学校・提案授業及び授業研究会 19
4．　附属学校園における大学教員の公開授業 23
5．　新任教員 FD 研修会 26

Ⅲ．活動報告 30
1．　FD 活動推進委員会の会議報告 30
2．　新任教員の活動報告：川野文行 31
3．　新任教員の活動報告：大下達也 33
4．　新任教員の活動報告：佐藤佐織 36
5．　新任教員の活動報告：紺谷正樹 40
6．　FD 発表の報告：学部教員による講話 46
「宇都宮大学との連携について－現状と課題－」

Ⅳ．編集後記 48
「FD を通して大学教員と附属学校園が連携することの意義」

Ⅰ．FD 活動推進委員会の活動

1. 今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的な FD 活動の推進

委員長　　安藤 哲也

2006 年 7 月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の中では，「教職課程が専門職業人たる教員養成を目的とするという認識が大学教員の間に共有されていない，教員の研究領域の専門性に偏した授業が多い，学校現場が抱える課題に必ずしも十分に対応していない」等の問題が指摘された。また，国立大学法人の第 1 期中期目標期間終了を踏まえ，2009 年 6 月 5 日に文部科学大臣が決定した「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」では，「附属学校園は学部・研究科等における教育に関する研究に組織的に協力すること」が強く勧告されている。このような背景のもと，本学教育学部では，当時の推進委員会が，教育学部教員の実践的指導力をさらに向上させるべく教育学部教員に適した FD プログラムを組織的に実行できるセンターの開設に努力し，2011 年 4 月から「教員養成 FD センター（以下，「FD センター」)」がスタートした。

2017 年 8 月の国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」の報告書では，「大学教員についての対応策」の中で早急に対応すべきこととして，「国立教員養成大学・学部において，研究者教員が一定期間，学校現場での教育実践研究の経験を積むことや，学校現場との共同研究を実施すること等について，時期や比率等に関する目標値を設定し達成状況をチェックすること等，教員養成分野の大学教員として必要な資質・能力を向上できる仕組みを整備することにより実際の学校現場における教育活動と教育学を融合できる大学教員を確実に増やすこと」が示されている。また，群馬大学中期計画（第三期）の「教育学部のアクションプラン」でも，FD センターに関する計画として「教員養成 FD センターを活用して，研究者教員が学校現場での指導を経験するための FD について検討する」（2016 年度）が明記され，本年度（2021 年度)は「教員養成 FD 活動推進委員会を活用して，研究者教員が学校現場での指導を経験するための FD について実施する」とされている。

このような提言や計画等からは，教員養成分野の大学教員として学校現場における教育活動と教育学を融合できる資質・能力及び実践力の向上に資する大学と附属学校園の連携による積極的な研修の実施が求められていることが窺える。一方で，このような研修に該当する機会は，学部・附属学校園が連携する活動の中に，既に少なからず存在している。たとえば，附属学校園の公開研究会や教育実習，学部教員による附属学校の児童生徒への授業や教員への校内研修等である。そこで，それらに FD の視点で大学教員が参加し，教育内容・方法や教育実践に資する自らの学びや気付き等を記録・報告する仕組みをつくることで実践的な FD の機会と位置付けるべく，2017 年度より FD センターとしての事業を実施してきた。その際，学部教員に対しては，次のような案内を行っている。

学部･附属学校連携室教員養成 FD センター（以下，FD センター）は，「学部と附属学校が連携して組織的な研修を実施し，教員養成に携わる教員としての自覚を涵養し，教育･研究指導能力の向上を図る」ことを目的としています。

現在，附属学校園と連携した活動を行っておられる先生は多いと思います。そのような附属学校園と連携した活動には，実質的に FD 活動に該当するものが少なからずみられます。そこで FD センターでは，附属学校園と連携した活動で FD 活動に該当するものについて，FD に位置づけ，それを推進することを本年度の重点取組としました。たとえば，附属学校園における公開研究会について，FD の視点による教員研修の位置づけ（事業計画化，事前案内等）と枠組み（規定様式の報告書提出による FD 参加登録，報告書の管理等）を設けることで，FD 参加の機会となり得ます。

これによって，昨年度から実施された「教員評価」においても，学部・附属学校園の連携活動が「FD への取組」に該当することが明確化されることになります。

本年度の重点取組の推進によって，FD センターの目的の達成をはじめ，学部と附属学校園の連携活動が一層活発になっていくように，ご理解とご協力の程，宜しくお願いいたします。

なお，具体的には，添付しました「学部･附属学校園連携による FD 活動（案内)」「FD センター事業計画（概要）2017 年度」「FD 参加報告書（様式 1～3)」をご覧頂ければと思います。

2020 年度より，教育学部が共同教育学部に改組されたことに伴い，学校教育臨床総合センターも教育実践センターに改められた。同様に，「教員養成 FD センター」は「教員養成 FD 活動推進委員会」へと改称された。新たな教育実践センターでは，よりよい組織を目指し，業務内容の見直しやスタッフの拡充などを行ったが，教員養成 FD 活動推進委員会の目的や業務内容に大きな変更はない。これまでの取組を基盤とした活動の継続性を大切にしたい。

本年度，学部教員提出の FD 参加報告書数をみると，公開研究会に関する報告書数は 22 件，教育実習に関する報告書数は 5 件，授業公開・研修会に関する報告書数は 18 件，新任教員 FD 研修会に関する報告書は 8 件，合計 53 件であり， 昨年度に引き続くコロナ禍の特別な状況でありながら，一定の成果を得ることができた。今後は，これまでの取組の一層の推進と充実を図り，学部教員に実践的な FD の機会をよりよく提供するとともに，学部教員が附属学校園を日常的に訪問することや附属学校園で授業をすることが当たり前の光景になることに貢献できるよう，努めていきたいと考えている。

2.　学部・附属学校連携推進室　教員養成 FD 活動推進委員会の構成

委員長	共同教育学部教授（教育実践センター）	安藤　哲也
副委員長	共同教育学部附属中学校副校長	関　　悟
推進委員	共同教育学部附属中学校教頭	木村謙太郎
	共同教育学部教授（教育実践センター）	吉田　浩之
	共同教育学部准教授（音楽教育講座）	菅生　千穂
	共同教育学部講師（数学教育講座）	小泉　健輔
	共同教育学部講師（技術教育講座）	小熊　良一
	共同教育学部講師（保健体育講座）	島　　孟留
	共同教育学部講師（教育実践センター）	紺谷　正樹

3. 2021 年度事業計画

(1) 学部教員への案内

共同教育学部 教員各位

学部・附属学校連携推進室
教員養成 FD 活動推進委員会

学部･附属学校園連携による FD 活動（発表、参加）に関する事業計画

学部･附属学校連携室教員養成 FD 活動推進委員会（以下、本 FD 推進委員会）は、「学部と附属学校が連携して組織的な研修を実施し、教員養成に携わる教員としての自覚を涵養し、教育･研究指導能力の向上を図る」ことを目的としています。

現在、多くの先生方が附属学校園と連携した活動に取り組まれていると思います。そのような附属学校園と連携した活動には、実質的に FD 活動に該当するものが少なくありません。そこで本 FD 推進委員会では、附属学校園と連携した活動で FD 活動に該当するものを FD として位置づけ、推進しております。たとえば、附属学校園における公開研究会は、FD の視点から言えば、教員研修の位置づけと枠組みを設けることで、FD 参加の機会となります。これによって、「教員評価」においても、学部・附属学校園の連携活動が「FD への取組」に該当することが明確になります。

こうした取組を推進することによって、本 FD 推進委員会の目的の達成をはじめ、学部と附属学校園の連携活動が一層活発になっていくように、ご理解とご協力の程、よろしくお願い致します。

なお、具体的には、添付しました「学部・附属学校連携推進室 教員養成 FD 活動推進委員会 2021 年度 事業計画（概要)」をご覧頂ければと思います。

(2) 対象事業

① 附属学校園・公開研究会（FD 参加）

期日：幼稚園 11/8(月)，小学校 6/25(金)，中学校 10/7(木)-8(金)，特別支援学校 11/12(金)

② 教育実習 A，C，D および附属幼稚園教育実習（FD 参加）

期間：教育実習 A，C，D および附属幼稚園教育実習の全期間

③ 附属小学校・提案授業及び授業研究会（FD 参加）

期間：11 月～2 月

④ 附属学校園における大学教員の授業（授業者は FD 発表，参加者は FD 参加）

期日：附属学校園の計画による

⑤ 附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会（講師は FD 発表，参加者は FD 参加） 期日：附属学校園の計画による

⑥ 新任教員 FD 研修会（講師は FD 発表，参加者は FD 参加）

期日：FD 活動推進委員会推進委員会による

(3) FD 参加登録および FD 発表登録

FD として参加したことの登録（以下，「FD 参加登録」）を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式(対象事業ごとに 3 種類)に記述し，教育実践センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。また，「教員評価」の「FD 参加」の資料として事務局（教育実践センター）で保管いたします。

また，附属学校園での授業者や研修会講師を務める等により「FD 発表登録」を希望する場合には，必ず事前（遅くとも 1 週間前まで）に，期日や内容等をメールで教育実践センター事務補佐員あてに連絡して下さい。こちらから学部教員に周知します。

① 附属学校園･公開研究会の場合

附属学校園における公開研究会に参加し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 1 に記述し，教育実践センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。なお，2 日間連続で開催される 1 つの公開研究会に，2 日間参加した場合については，1 つの公開研究会で FD 参加登録のカウントは 1 回となります。たとえば，附属小学校公開研究会（2 日間開催）に，1 日の参加で 1 回のカウント，2 日間ともに参加した場合でも 1 回のカウントとなります。

② 教育実習の場合(教育実習 A のみ特別協力校を含む)

附属学校園における教育実習期間に，学生の授業等を参観し，FD 参加登録を希望する場

合は，所定の FD 参加報告用の様式 2 に記述し，教育実践センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。なお，1 つの教育実習の期間中で複数回の参観日があった場合については，1 つの教育実習で FD 参加登録のカウントは 1 回となります。たとえば，教育実習 A で 1 回，教育実習 C で 1 回となります。

③ 附属小学校･提案授業及び授業研究会の場合

附属小学校・提案授業及び授業研究会に参加し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 1 に記述し，教育実践センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。なお，1 つの提案授業及び授業研究会に参加ごとに FD 参加登録のカウントは 1 回となります。

④ 附属学校園における大学教員による公開授業の場合

授業者の大学教員は，FD 発表となります（当該授業を学部教員に事前に案内する）。また，授業を参観し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 3 に記述し，教育実践センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。なお，同じ授業者による同じ内容の授業が複数回実施され，その授業を複数回参観した場合には，FD 参加登録のカウントは 1 回となります。

⑤ 附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会の場合

各附属学校園単位以上で，教員研修会として位置づけ開催した研修会の担当講師の大学教員は，FD 発表となります（当該教員研修会を学部教員に事前に案内する）。また，研修会に参加し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 3 に記述し，教育実践センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。

⑥ 新任教員 FD 研修会の場合

研修会では，学部･附属学校園の連携活動に関連する内容を取り上げ，また附属学校園の教員がメンバーとして参加し意見交換等を行うため，FD として有意義な機会となります。主として新任教員を対象としていますが，それ以外の学部教員へも参加を案内いたします。研修会で講師の大学教員は，FD 発表となります（当該研修会を学部教員に事前に案内する）。また，研修会に参加し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 3 に記述し，教育実践センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。

(4) FD 参加報告様式(1～3)

様式 1　FD 参加報告用（公開研究会）

学部・附属学校連携推進室 教員養成 FD 活動推進委員会 宛

提出先：

教育実践センター

事務補佐員　品川仁美

E-mail: h-shina@gunma-u.ac.jp

提出日：令和＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

大学教員名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☐ 参加事業：附幼・附小・附中・附特　（〇で囲む）

☐ 参加期日：＿＿＿月＿＿＿日

☐ 参観授業名（1 つ），あるいは 講演タイトル名

※ 授業を記述の場合　：〇年〇組，教科，タイトルなど。保育参観の場合は学級名。

※ 講演会を記述の場合：講演のタイトル名。

教育の内容および方法等に関連して参考になった点や，参加してよかった点など ※字数任意

様式２　FD 参加報告用（教育実習）

学部・附属学校連携推進室 教員養成 FD 活動推進委員会 宛

提出先：

教育実践センター

事務補佐員　品川仁美

E-mail: h-shina@gunma-u.ac.jp

提出日：令和＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

大学教員名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☐ 参加事業：附幼・附小・荒牧小・桃川小・附中・伊三中・附特　（〇で囲む）

☐ 参加期日：＿＿＿月＿＿＿日

☐ 参観授業名（1 つ）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

※ 〇年〇組，教科名，タイトルなど。保育参観の場合は学級名を記入ください。

教育の内容および方法等に関連して参考になった点や，参加してよかった点など ※字数任意

様式３　FD 参加報告用（公開授業・教員研修会）

学部・附属学校連携推進室 教員養成 FD 活動推進委員会 宛

提出先：

教育実践センター

事務補佐員　品川仁美

E-mail: h-shina@gunma-u.ac.jp

提出日：令和＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

大学教員名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☐ 参加事業：附幼・附小・附中・附特　（〇で囲む）

☐ 参加期日：＿＿＿月＿＿＿日

☐ 参観授業（1 つ），あるいは 研修会名

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

※ 授業の場合　：〇年〇組，教科名，タイトルなど。

※ 研修会の場合：タイトルなど。

教育の内容および方法等に関連して参考になった点や，参加してよかった点など ※字数任意

Ⅱ．事業報告

1.　附属学校園・公開研究会

推進委員　菅生 千穂

(1) 事業概要

本年度は，感染症拡大防止の観点から，昨年度に倣いオンラインを活用した公開研究会，講演会等が実施された。昨年度の知見を活かし，収録した授業動画をあらかじめ YouTube 等により一定期間配信し，参加者，指導助言者ともにそれらを視聴した上で Zoom や Google Meet 等のオンライン会議ツールを活用しオンラインで授業研究会，保育を語る会を行うという形式がとられた（表１）。講演会も配信を用いることで，視聴者は参加都合に合わせてアクセスが可能となるなど，新しい方法の模索が継続している。

表１　今年度実施された公開研究会・講演会の事業一覧

開 催 日	学校種	事　業	内　　容
R3.6.25	附属 小学校	公開研究会	公開授業動画配信 6/21-25 オンライン授業研究会　6/25　(Zoom) 研究主題「社会に変革を起こす子どもの育成 ＜一年次＞ ～情報活用の視点から行う授業改善を中心に位置付けたカリキュラムマネジメント～」
R3.11.6	附属 幼稚園	公開研究会 講演会	オンラインによる公開研究会，保育を語る会，および講演会 研究主題「幼児の遊びを豊かにする教育課程の見直し ～異年齢の関わりから見えてくるものを手掛かりにして～」
R3.10.15- 10.22	附属 中学校	公開研究会	ＩＣＴに関わる実践発表会(配信10/15-19) 授業研究会（Zoom）　10/20-22 10/20 社会，美術，学級活動 10/21 国語，理科，保健体育，技術 10/22 数学，英語，音楽，道徳 ワークショップ　10/20-22　(Zoom)

R3.10.15- 10.19	附属 中学校	講演会	「GIGAスクール構想で求められる情報活用能力の育成」YouTube配信
R3.11.12	附属特別 支援学校	公開研究会 講演会	授業公開・提案授業（動画配信 11/8-12） 授業研究会（Google Meet） 11/12 講演会「『各教科等を合わせた指導』の授業づくりで大切なこと」講演者：名古屋恒彦教授（植草学園大学発達教育学部）

（2）報告

FD 活動への参加報告数（前年件数）は全 22（21）件であり，公開研の校種別内訳は，附属幼稚園 1(4)件，附属小学校 10(0)件，附属中学校 8(13)件，附属特別支援学校 3(7)件であった。上記（１）に記載の通り全ての事業がオンラインにより開催され，動画や講演会の配信期間にも幅があるため，アクセスは簡便化しているように見受けられる。一方で，報告書は任意提出のため，提出件数と事業への実際の参加人数の関連はここでは言及できないが，新任教員の FD 研修，また，提案授業や授業研究会の指導助言等で関わりのある大学教員からの報告が寄せられている。多忙な業務の中，FD 活動の一環として報告書を提出下さった方に感謝申し上げる。以下，FD の参考となる記述等をまとめる。

○附属幼稚園

愛育幼稚園園長・前お茶の水女子大学附属幼稚園副園長の上坂元絵里講師による Zoom での講演会には，約 55 名の視聴があり大変好評を博した。また，幼稚園における異年齢交流の事例に基づく教育課程の有りようが提案され，附属幼稚園がモデル園としての使命を果たしたと報告された。

○附属小学校

GIGA スクール構想の中で，全国の学校が実際にタブレット等を活用した取組をスタートさせた中で，県内の ICT を活用した授業改善の現状と方向性を把握することができた。１）言語活動の活性化，意見共有，２）見えにくいものの可視化，３）学習過程の俯瞰と学習効果，などの視点に集約されると考える。具体的には，１）「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善のモデル例として，ICT 活用による説明文の表現方法への着目，深い学びに繋がる言語活動（国語）があげられた。また，iPad（ロイロノート）を活用し，自身の意見を積極的に書き，他者と交流し，全体で意見共有するなど，である。２）の可視化，としては，実験データの共有，部屋の換気や煙の行方等の録画とペン描きによる可視化，「AR フィールド」や「ひかりの世界」など，見えにくい造形活動を ICT 活用により「見える化」したものがある。また，３）について，ICT 機器利用を取り入れた授業展開による学習効果が

重要視されているが，算数科では，今回動画配信により，一人の児童の手元での操作過程を見ることで，「児童が理解の結果を表現するに至るまでの過程」や，「児童が図形や数を扱うために必要な感覚を身につけていくステップ」を捉えることができ，有意義に感じた報告が複数ある。学習過程に機器操作という新たな手続きが入ることになり，この点についての議論は重要で，今後の研究や教員養成における課題を得た。

○附属中学校

附属中学校は昨年から研究的に取り組んでいる ICT 活用が，授業改善のみならず，校務改善の両面で急速に進んでいることを具体的な説明で捉えることができたと報告がある。

報告に挙げられた授業では，教育用数学アプリ「GeoGebra」を用いた数学授業が複数名によって触れられた。GeoGebra による実験にふれ，実験が手軽になり，かつ効率的なだけでなくこれまでできなかった多様なアプローチを可能にすると期待している。一方，アプリにより正確に図形を描くことができ，正確に描けすぎるため不適切に活用すると機器（アプリ）による実験や結果を正解とし，自ら思考を深める必要性を感じなくなるのでは，という懸念も生じたとの指摘もあり，興味深い。外国語教育での ICT 活用も複数挙げられた。メリットや課題がより鮮明になり，大学での外国語教育への参考となった，とある。中学生の生徒らは生き生きしており，授業構成として，一人で行う考察とグループで行う考察のバランス等が参考になった。国語では，文学作品において心情の読みなどに偏る授業が多くなりがちであるが，表現技法の面から主人公の心情理解に迫る点について，他の教材や作品にも繋がり参考になったと報告された。

このように今年の FD 報告では，中学校現場での ICT 活用による授業改善において，各教科の具体例に触れて大学教育への示唆を受けた点が印象深かった。数学授業では，ICT 活用ならでは，の視点と，同問題を ICT の活用無しで取り組むとしたらどのような展開が考えられたか，との議論もあったようだ。授業に道具を新規導入する際には，生徒の理解に即したメリット／デメリットを適正に把握して道具を選択することが重要とし，道具の導入の功罪にも課題意識が及んだ。

また昨年の報告では課題として，教員研修，校内の体制作り，ネット環境やトラブル対応など環境整備の重要性が指摘されていたが，今年は校務改善に ICT が活用されているとの報告があった。

○附属特別支援学校

「教科等に合わせた指導」については昨年も FD 報告書に記述が見られたが，今年度は研究テーマとされている。報告書では参観したそれぞれの授業について以下の報告がある。小学部算数では，「かたち」の捉えにふれ，授業者が直感的に理解している「かたち」（言葉と概念）に対し，算数・数学の学習を通して，子供たちの捉え方の何が変化していくのかを見とるためには，授業者の幾何学の知識が重要であると実感した。また，「生活単元学習」で

は，「生活上の課題の解決を通して各教科等の内容を学ぶ」特徴として，生活科，国語科，図画工作科，自立活動と，広く深い学びが生じるよう構成されていた。各教科等の学びを優先すると，学習活動が不自然になりがちだが，自然な学習活動が展開されており，学習指導案上で，学習活動ではなく評価の観点に教科の学びを入れ込んでいるのではと，参考になった。高等部では，新学習指導要領完全実施に伴う教科指導の進め方と解釈，自立活動の抑え方についてキャリア発達を踏まえての展開がなされ，本年度は「合わせた指導」としての作業が示され感染症への対応も踏まえた終了に向けてのポイントが具体的に示された。

（3）成果･次年度に向けて

感染症流行は依然収束を見せないが，今年度は附属学校園の公開研究会などにおいて，昨年度から急速に ICT 活用が広がりを見せ，授業改善，校務改善，研究課題の深化に繋がっている様子が報告されている。また， FD の観点から大学教育への示唆についても実感を持って報告されたと感じる。新学習指導要領の完全施行，大学改革に加え，ウィズコロナ時代として，次年度以降も大学でのオンライン授業が一定程度併用されていくことになるだろう。附属学校園との連携活動の振興は一層意義深いと考え，引き続き，本委員会の役割を模索していきたい。

2. 教育実習 A，C，D および幼稚園教育実習

推進委員　紺谷 正樹

(1) 事業概要

教員養成を目的とする大学・学部において，周知の通り，教育実習はその「要」に位置付けられる。教員志望学生は，教育実習を通して教育の現実世界に触れる機会を得ると同時に，学生一人一人にとって，それまで自分が積み重ねてきた教職への努力を問いただす試練の機会と捉える必要がある。本学部の教育実習は，１年次から４年次にかけて，学校現場での体験と学部での専門教科の学習を段階的・往還的に設定してある。その概要は，教育現場体験学習⇒授業実践基礎学習⇒教育実習事前事後学習及び教育実習Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・幼稚園実習・高校実習⇒教育実践インターンシップである。

本事業の目的は，附属学校園と連携した活動，とりわけ教育実習における参観を FD 活動推進委員会の活動として位置づけることにより，本学教員の主体的な気づきを促すことにある。今年度は昨年度来の蔓延的なコロナウィルス感染症拡大の影響をうけるなか，附属学校園の努力により，「3 密」を避けながらの人数制限による参観を実施した。以下は今年度の教育実習に関連する概要である。

① 教育実習 A

対象：学部 3 年生，大学院 2 年生（障害児教育専修をのぞく），教員免許取得プログラム履修者

学校名	事前指導	本実習
附属小学校	6 月 21～25 日，8 月 25 日	9 月 1 日～10 月 4 日
荒牧小学校	8 月 23・24 日	8 月 31 日～10 月 1 日
桃川小学校	8 月 23・24 日	9 月 1 日～10 月 1 日
附属中学校	8 月 23・24 日	8 月 26 日～9 月 27 日
伊勢崎市立第三中学校	8 月 17・18・19 日	9 月 1 日～10 月 1 日

※附属小中学校の教諭が講師となる事前事後学習

・学習指導案作成指導　　6 月 2 日
・実習校別オリエンテーション　7 月 14 日
・教育実習事後学習　　12 月 15 日

② 教育実習 C（特別支援学校）

対象：障害児教育専攻 3 年生

内　容	A 日程	B 日程
事前指導	10 月 4 日	10 月 5 日
事前観察	11 月 12 日	11 月 12 日
本実習	11 月 15 日～19 日	11 月 29 日～12 月 3 日

※事前指導ならびに事前観察は附属特別支援学校で実施

③ 教育実習 D(特別支援学校)

対象 : 障害児教育専攻 4 年生，他専攻で特別支援教育を履修している 4 年生，専攻科生，
大学院 2 年生（障害児教育専修の教員免許取得プログラム履修者）

学校名	実習校事前指導	本実習
高崎特別支援学校	5 月 25 日 7 月 1・2 日 8 月 30・31 日	9 月 2 日～9 月 24 日
二葉特別支援学校	5 月 26 日　6 月 25 日 7 月 5～9 日　9 月 3～7 日	9 月 8 日～9 月 30 日
渋川特別支援学校	5 月 13・18・28 日 7 月 6 日　9 月 1・2 日	9 月 6 日～9 月 28 日
渡良瀬特別支援学校	6 月 7・8・24・25 日	9 月 1 日～9 月 22 日
群馬県立聾学校	7 月 1・19 日　9 月 1 日	9 月 2 日～9 月 22 日
前橋特別支援学校	6 月 29 日　7 月 12 日 8 月 31 日	9 月 1 日～22 日
附属特別支援学校	A 日程:6 月 25・28・29 日 B 日程:6 月 25 日 7 月 5・6 日	A 日程:8 月 31 日～9 月 8 日 B 日程:9 月 9 日～9 月 17 日

④ 幼稚園実習

対象：4 年生希望者

観察実習：7 月 13・14 日

事前指導：8 月 2 日

本実習　：9 月 2 日～9 月 14 日　or 9 月 8 日～21 日

事後指導：9 月 28 日

(2) FD 報告

以下の表は FD 活動報告委員会に提出された報告書の一例を抽出したものと附属中学校での公開された研究授業の内容である。

表１　FD 活動報告委員会に提出された報告書の一例

	参観日	参観内容	報告内容
附属小	9/13 ・16 ・18	教育実習 A の授業	附属小でのここ３年ほどの蓄積もあり，大半の授業でタブレットを活用していた。おおむね授業の流れの中で無理なく活用できていたが，基本的な操作で手間取る実習生も一部あり，学部での指導の課題もみえてきた。
附属中	9/9	技術分野（はんだ付けの実技指導）	附属中による実習生が行う通常授業の参観をしてきた。３年生に関しては，指導案の書き方，教科の指導方法，ＩＣＴ活用など３年間指導してきたが，それらの指導が教育実習に生かされていたことは感慨深いものがあった。授業としては，丁寧に教材研究がなされ，生徒一人一人にしっかりした対応ができていた。安全指導の面で課題があったのでその点について助言を行った。実習生の授業ではあるが，自分の大学の授業を振り返るよい機会となった。今後は，この気づきを授業に生かしていきたい。 　最後に，コロナウィルスの中で多くの学生を受け入れていただいている学校に感謝したいと思う。
	9/17	数学（一次方程式の利用）	ICT 教育による数学の授業の形式が変わってきた。効率化が図られている。コミュニケーションの方法も機器の使い方に応じて工夫が必要になると思われる。
	9/17	数学（相似と比）	実習生，生徒ともに，タブレットを使いこなして授業を進めていた点が大変興味深かった。図形を扱う際，作図用のアプリ（Geogebra）を用いることで，生徒たちは先入観により歪むことなく，手軽に，正確に様々な図を描くことができるようになっており，生徒にとって「実験すること」への心理的・技術的なハードルが大きく下がっているように感じられた。今回は初めての教育実習の研究授業の参観であったので，何もかもが新鮮な体験であったが，「教育実習の参観」という観点を度外視しても，タブレットの導入による，数学教育における新しい展望の片鱗を見ることができたことは，自分にとって，非常に大きな収穫だったと思う。
伊勢崎三中	9/28	数学（走行時の速さとブレーキ痕の長さの関係）	現実の物理現象を数学的に捉え，逆にそれを現実の予測に応用するという内容であった。数学と現実（物理）との違いを学ぶことができる良い題材であった。考察の元となるデータの提示方法や生徒とのやりとりの仕方は参考になった。

表２　附属中学校での公開された研究授業の内容

日付	教科	単元	授業内容	学年
９月 16 日	国語	森には魔法使いがいる 紙の建築 async-同期しないこと／問いかける言葉	小見出しをつける 意見文を書く 主張のよりどころを捉える	１年 ２年 ３年
	社会	ヨーロッパ州 欧米の進出と日本の開国 人権と共生社会	ヨーロッパ州の課題 江戸幕府の滅亡 「公共の福祉」	１年 ２年 ３年
	音楽	作曲者の想いを考えながら鑑賞しよう	「ブルタバ」の鑑賞	３年
	英語	Program４ Program４	比較級，最上級 分詞の後置修飾	２年 ３年
９月 17 日	数学	一次方程式 一次関数 相似と比	一次方程式の利用 一次関数の利用 中点連結定理	１年 ２年 ３年
	理科	光と音 化学変化と熱 生命の連続性	凸レンズの働き 発熱反応，吸熱反応 遺伝の規則性	１年 ２年 ３年
	美術	分かりやすく情報を伝える	ピクトグラム	２年
	保体	バドミントン ソフトボール	未定 未定	１年 ２年
	技術	エネルギー変換	はんだづけ	２年

（3）成果と課題

前述したように本事業の目的は本学教員の主体的な気づきを促すことにある。今年度の FD 報告書における「主体的な気づき」を抽出し，それについての考察を成果とする。

【成果】GIGA スクール構想における１人１台端末の ICT 環境の早期実現に伴う気づき

（ア）指導方法の変化

・FD 報告書を概観すると「タブレット」「ICT 活用」「作図用のアプリ」「データ」等の語句が散見される。当初，GIGA スクール構想のロードマップでは１人１台端末の ICT 環境の整備は 2024 年度において小学校 1・2 年生に配布する予定であった。しかし，コロナウィルスの世界的な大流行に伴い，臨時休校や分散登校に伴う授業時数の調整が余儀なくされ，「学びを止めるな」を大号令として，2021 年の早い段階において義務教育段階の児童生徒全員にタブレット端末が行き渡った。公立学校をはじめとする教育現場はその操作利用

教育や効果的な活用場面の共通理解など，その研修に追われていた。こうした状況の中，附属学校園に関しては，タブレット端末の活用に関して，スムーズな導入がなされており，教育実習生はこれまでにない指導方法を目の当たりにすることになった。本学の教員が附属学校園の ICT 活用の実例ならびに本学の学生がそれを使いこなして授業展開をしている様子を参観できたことは主体的な気づきにつながったに違いない。

（イ）児童生徒間のコミュニケーションの変化

・学校における ICT 機器の導入並びに ICT 環境の整備によって変化が期待される学習場面は協働学習の場面である。これまで教育現場では協働学習は主に机の配置を変えて 4 人程度の話し合いのグループ学習が多かった。しかしこれからは，オンラインホワイトボードのアプリケーションソフトウェアを活用して，同時にそれぞれの意見を大型テレビに投影することにより，共有することが可能になった。このことは，授業の効率化にもつながる。

【課題】教科横断的な視点に立った大学教員間の交流

本学の教員による附属学校園の授業参観は，基本的に自分自身の講座の教育内容に関するものが参加した事例が多いが予想される。言うまでもなく，教科ならではの見方考え方を醸成するために必要なことである。一方，予測不可能な時代と喧伝されておる昨今，「STEM 教育」「総合的な探求の時間」など，これからは教科横断的な視点に立つことも必要である。つまり，授業参観を通して本学教員が他分野と交流を深める機会の設定が課題と言える。

3. 附属小学校・提案授業及び授業研究会

推進委員　島　孟留

(1) 事業概要

人々が歩む未来は，VUCA（Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity）の時代だと考えられている。その時代を生き，かつ，地球全体の well-being の実現，つまり全ての人々が個人的にも社会的にも健やかに生きることができる未来の創造に貢献できる人材育成が，教育に求められている。これに貢献すべく，群馬大学共同教育学部附属小学校では，令和２年度より「社会に変革を起こす子ども」の育成を目指し，研究を進めており，本年度は，その２年次にあたる。

１年次研究では，「社会に変革を起こす子ども」の姿を具体化し，その姿が現れるように，情報活用の視点からカリキュラム・マネジメントを実施した。また，「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れるための要因を，情報活用の視点から検討し，ICT 活用による学習指導の工夫を再考した。その結果，子どもたちは，問題解決に必要となる多様な情報を活用（【情報の収集】【情報の吟味】【情報の関連付け】【情報の処理，表現】）し，自分の考えを伝え，他者の考えに影響を与える姿が見られたことから，「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れる上での情報活用の必要性の一端を示した。

一方で，子どもたちの姿から，情報活用能力を最大限活かす上での「非認知能力」の必要性が見られた。そこで，２年次にあたる令和３年度では，「非認知能力」を高める学びのデザインの在り方に主眼を置き，実践が進められた。具体的な研究課題は，以下の４つである。

- 各教科等における「社会に変革を起こす子ども」の育成で重視する非認知能力は，どのようなものか。
- 各教科等における非認知能力が発揮された姿は，どのような姿か。
- 各教科等における非認知能力が発揮された姿が現れるための学びのプロセスは，どのようなものか。
- 各教科等における非認知能力を発揮する学びのデザインは，どのようなものか。

各教科で実践された授業（いずれも Zoom 上でのリアルタイム配信）については，以下の通りである。

【国語科】

「ようすをくわしくつたえよう『とうすをあらわすことば』」（第２学年）

日時：令和３年 11 月 18 日（木）　10:30~11:15

授業者：長嶋 愛香

重視する非認知能力：忍耐力，社交性

目指す姿：ペアやグループの友達と学習課題の解決に向けた考えを聴き合う中で，友達が文

章を修正したり，文章に自信をもったりできるようにしている
【図画工作科】
「カゼ装置」（第 2 学年），
日時：令和 3 年 11 月 18 日（木） 13:35~14:20
授業者：大塚 祐貴
重視する非認知能力：社交性，目標への情熱
目指す姿：風の力の強弱や向き，使用する材料の重さや硬さを基にしたものの動き方を自己が製作している仕掛けや言葉によって伝えている
【英語科】
「すごいぞ日本！プレゼンテーション」（第 5 学年）
日時：令和 3 年 11 月 24 日（水） 13:35~14:20
授業者：原 雄規
重視する非認知能力：目標への情熱，思いやり
目指す姿：「来日前の群馬大学の留学生に日本文化の紹介をしよう」という課題の解決に向けて，友達と日本文化についての紹介をし合い，相手からの反応を基に，日本文化の紹介をする英語表現や表現内容を改善して伝えている
【理科】
「電気の通り道」（第 3 学年）
日時：令和 3 年 11 月 30 日（火） 10:30~11:15
授業者：井上 俊介
重視する非認知能力：社交性
目指す姿：「電気を通すつなぎ方で学んだこと」「電気を用いた機器に触れた生活経験」「光るおもちゃに働きかけた体験」を基にした自分の予想を伝えることで，他者の予想を実証性・再現性・客観性に照らし合わせた予想にできる子ども
【音楽科】
「詩と音楽の関わりを味わおう」（第 6 学年）
日時：令和 3 年 11 月 30 日（火） 13:35~14:20
授業者：稲森 稚明
重視する非認知能力：楽観性，敬意
目指す姿：自他の『ふるさと』の音楽表現を基に，曲想と音楽表現の工夫を結び付けて考え，考えたことを記述したり発言したりしている
【算数科】
「かけ算のきまり」（第 2 学年）
日時：令和 3 年 12 月 14 日（火） 10:30~11:15
授業者：中野 紗織
重視する非認知能力：目標への情熱，敬意

目指す姿：言葉や数，式，丸図，九九表を用いて，かけ算を使った九九表にない数の求め方を筋道立てて説明している

【道徳科】

「いじめに負けないために ～スイミー作戦・ガンジー作戦」（第 5 学年）

日時：令和 3 年 12 月 14 日（火） 13:35~14:20

授業者：栗原 和馬

重視する非認知能力：社交性，目標への情熱

目指す姿：学習課題「どうしていじめや差別があるのだろう」の解決に向けて，他者の学習課題に対する考えを聞いた上で，自己の学習課題に対する考えを他者に伝えている

【社会科】

「世界の平和と日本の役割」（第 6 学年）

日時：令和 4 年 1 月 25 日（木） 13:35~14:20

授業者：樋口 晃

重視する非認知能力：社交性，自信

目指す姿：「戦時下の人々の生活を明らかにする」という問題の解決に向けて，調べて得た事実や自らの考えを，根拠を示して伝えている

【体育科】

「ボンバーゲーム」（第 2 学年）

日時：令和 4 年 1 月 31 日（火） 10:30~11:15

授業者：北浦 佑基

重視する非認知能力：社交性，自信

目指す姿：ボンバーゲームで，相手コートの守りがいない場所をねらってボールを投げるという課題に応じた解決策を動きや言葉で伝えている

【生活科】

「かぞくの中のぼく・わたし」（第 1 学年）

日時：令和 4 年 2 月 2 日（水） 10:30~11:15

授業者：狩野 葵

重視する非認知能力：敬意，自己抑制

目指す姿：2 回目のお手伝いチャレンジの計画を伝えたり見せたりし，友達が 2 回目のお手伝いチャレンジの計画を 1 回目の計画よりも家族のために続けてできる計画に変えている

（2）報告

業務の合間を縫ってご参加・ご報告いただいた先生方のご意見をまとめたものを，以下にご紹介させていただく。

【英語科】

・本時の目標を，児童の言葉から設定していた。大学講義の各授業でも，その時間の目標を

学生とともに考え，ある意味での反転授業を展開し，その効果を通常授業と比較して検証してみる価値はあるかもしれない。

・１人１台のタブレット端末を活用して，各児童がプレゼンテーション，活動成果の提出をしていた。視覚的情報を効果的に活用して，自身のプレゼンテーションの説得力の向上とともに，「個別最適学習」の促進につながっていた。

【算数科】

・「クリスマスの飾りの購入」という，児童にとって季節的に身近な話題を基にした授業内容であった。

・九九表の範囲外にある数「34（約数が 1，2，17，34)」を，かけ算を用いて表す授業展開で，児童の数学的思考に働きかけるのに有効な授業であった。

・因数分解や概算と通じる内容となっており，以後の算数・数学学習につながるものであったことも参考となった。

・タブレットの利用が進んでおり，ICT をいかにして利用していくかについて参考となった。

・数の設定は大変有効であったが，条件（本件では袋に入った飾りの数の種類）の設定に曖昧さが残った。この条件設定を有効に活用することで，さらに深まりのある学習活動に転化したと考える。

【社会科】

・戦時中の人々の生活について，iPad をもちいた情報の集約，そこからの共通点抽出，共通点の背景に関する教師による追究型質問が行われた。

・振り返りでは，他児の意見を踏まえた上での記述が求められた。

・iPad を用いたグループワーク，本質的理解へ迫る追究型発問，本時を踏まえた振り返りの内容などが，深い理解をもたらす授業の組み立て方として参考になった。

（3）成果･次年度に向けて

前年度の研究課題であった ICT 活用で得た知見を活かしつつ，いずれの授業も，子どもたちが楽しく取り組めて，かつ子どもたちの知らぬ間に非認知能力が養われている，というような授業内容であったように感じる。これらは全て Zoom でのリアルタイム配信で開催されたため，コロナ禍であったものの本学内外からの参加を得られた。録画映像を視聴できるなど，オンライン開催の利点を活かすことで，さらなる参加者や多角的な意見が得られるかもしれない。

4.　附属学校園における大学教員の公開授業

推進委員　木村　謙太郎

事業内容(各公開授業内容等の報告)

① 附属小学校 令和3年7月19日(月) 第4学年3クラス

国語教育講座　准教授　河内昭浩

国語　「読書感想文を書こう」

「一つの花」(光村４上)

『考える読書　第 65 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集』(毎日新聞出版)『ゆりの木荘の子どもたち』『カラスのいいぶん』(課題図書・小学校中学年の部)

授業概要：

本単元は，教科書教材（「一つの花」）を用いた「読むこと」の学びを生かし，文章を読んで感じたことや考えたことを，工夫しながら読書感想文として「書くこと」の力を育成することを目的としている。

まず，既習の読むことの教材である「一つの花」の感想を記述した。次に，読書感想文コンクールの入賞作品を示し，自分の書いた「一つの花」の感想文との違いについて考えさせた。学び合いの中で，入賞作品には，自分の体験が多く含まれていること，その体験が文章の内容と結び付けられていること，会話文などで読み手に伝える工夫をしていることなどに気付かせることができた。そして，「一つの花」の感想文を「読書感想文」へと再作文させた。こうした一連の学びが，後日，新たな本を手に取り，文章を書くまでの過程の体験になると考えている。

② 附属小学校 令和3年10月6日(水) 第4学年1クラス

附属小学校　糸井伸允

特別支援教育講座　教授　霜田浩信

算数　一人一人の特性やニーズに応じた算数科の指導・支援の実践

～育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿った，特性による困難さを捉えることを通して～

授業概要：

発達障害等の児童が抱える，特性と算数の学習における特性による困難さ，指導の工夫の意図，手立てを，育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿って時系列で整理し直し，それらを基に授業を構想し，授業実践を行った。

視覚情報をなるべく用いながら，複数の情報は絞って焦点化することや，話合いの際は，

特定の児童のみが発言するのではなく，全員に表現の機会を保障すること，一人一人の学び方に応じた見通しと振り返りの機会を設定することが手立ての有効性として明らかになった。

③ 附属中学校　令和3年7月15日(木)　第3学年4クラス

国語教育講座　准教授　河内昭浩

国語　具体例をもとに説明文を書く

授業概要：

本時は，自分の体験を一般化し，改めて文章にする学習を行った。生徒は事前に，「中学校での思い出２つとその理由」という課題で作文を書き，Google Classroom に事前に提出した。本時の導入では，入試や社会で求められている国語の力について実際の入試問題を例に説明を行った。生徒は自分の体験や経験だけでなく，一般社会にどのような意味があるか(一般化)しながら作文を書くことが大切であると理解することができた。次に，ロイロノートのシンキングツール「ベン図」を用いて，自分の２つの思い出の共通点と相違点をまとめる学習を行った。生徒は，共通点の自分や社会にとっての意味を整理した。最後に，２つの思い出に共通する事柄や特徴を整理した上で，「中学校時代の思い出」の文章を再文章化する活動を行った。

④ 附属中学校　令和3年10月21日(木)　第3学年4クラス

国語教育講座　准教授　河内昭浩

国語　古典を読み，文章に表れているものの見方・考え方について考える

―修学旅行と『おくのほそ道』―(教材「立石寺」)

授業概要：

事前学習として，修学旅行で日光を訪れた時の気持ちを授業の前日までにスプレッドシートに記入させ，授業でそれを提示するようにした。

授業の導入では，修学旅行事前学習スライドを改めて見ながら，日光東照宮を訪れた時の芭蕉の気持ちと自分や仲間の気持ちを比較したり，俳句のきまりを確認したりした。

追究する過程では，「立石寺」を音読するとともに，５Ｗ１Ｈ を把握し「立石寺」の概要を掴むことを行った。生徒に，相手に伝わるように表現するには，文章に５Ｗ１Ｈを置くことが適切であり，優れた文章（古典も含め）はそのようにできていることを伝えることで汎用的な知識として理解することができた。また，文章に表れているものの見方・考え方について考える場面を設定し，「立石寺」に込められた芭蕉の思いについて考える活動を行った。生徒は，『「静かだ」は気持ちなのかな』『寂しい感じがする』などの気付き

があった。

まとめる過程では，修学旅行や中学校の思い出の中から俳句にしたい場面と気持ちを選ばせる活動を行った。その際に，気持ちをストレートに表現し過ぎないように伝えた。

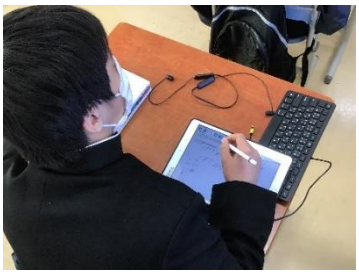
⑤ 附属中学校　令和4年1月14日(金) 第3学年4クラス

数学教育講座　教授　伊藤隆

数学　「あみだくじと数学」

授業概要：

「あみだくじ」を数学的に考察する授業で,「あみだくじを何回つなげると元に戻るのか」や「たて線７本のあみだくじが１つあり,何回つなげるまでに元に戻るのか」について考えた。「あみだくじ」を「あみだ関数」として捉えたり,「あみだ関数」から「あみだくじ」を作成する XH 法を用いて考えたり，様々な視点であみだくじを考察した。あみだくじを「あみだ関数」としてどのように捉えるのか,「あみだ関数」にすることでかけ算をしながら学習を進めるなど,具体的な場面を提示しながら授業を行った。また,授業後，各教室に出向いて質問を受け，生徒の疑問に答えた。生徒たちは新しい概念に興味をもち，試行錯誤しながら取り組むことができた。



⑥ 附属中学校　令和4年2月10日(木) 第1学年4クラス

数学教育講座　准教授　石井基裕

数学　「オイラーの定理と１対１対応について」

授業概要：

n を自然数としたときに「奇数のみによる n の分割の総数」と「異なる数による n の分割の総数」は等しいことを学ぶ数論の授業を行った。

まず，具体的に「５個のりんご」を使って，りんごの個数がすべて奇数になる分け方とりんごの個数がすべて異なる分け方のそれぞれの総数を考えた。次に，この２種類の分け方の総数が同じであることが「オイラーの定理」であることを伝え，りんごではなく具体数を使って考えさせた。

その後，５という数以外にも成り立つのかという疑問をもたせ，１，２，３,・・・と順番に定理が成り立つことを確かめた。実際の数を利用して考えたため，多くの生徒がいつでも成り立ちそうであることは理解できた様子であった。中学１年生なので，一般化までは行わなかったが，その不思議さに興味をもった生徒は多かった。

5. 新任教員 FD 研修会

推進委員　小熊 良一
推進委員　小泉 健輔

事業概要と報告

① 第１回

期日：2021 年 6 月 1 日（火）
時間：16 時 00 分～17 時 30 分
場所：共同教育学部 6 号館 108 教室
内容：

１．2021 年度 FD 活動推進委員の紹介，新任教員の紹介
２．共同教育学部の歴史，組織，特色（藤森学部長）
３．2021 年度　新任教員 FD 研修の概要（安藤）
４．附属学校園の役割（関副校長）
５．教員養成の仕組み（安藤）
６．意見交換
７．その他
　次回（第 2 回研修会）について

本年度新任教員 FD 研修会で研修を行う新任教員は 4 名である。第 1 回となる本研修会では，本研修会で行う FD 研修の概要，本学共同教育学部の特色，附属学校園に関すること，教育実習の内容等について説明がなされた。藤森学部長からは，共同教育学部設置の背景や群馬大学・宇都宮大学両大学の特色を活かしたシナジー効果について詳しい説明がなされた。また，関副委員長からは，附属中学校の内容を中心に，附属学校園の役割，また学部教員の特別授業や共同研究などの学部と附属の連携の推進について詳しい説明があった。新任教員からは「着任したばかりで学部の様子について分からないことが多かったので，大変参考になりました。」といった感想が寄せられた。初回の研修会として，大変有意義な場を提供できたものと思われる。

② 第２回

期日：2021 年 7 月 20 日（火）

時間：16 時 00 分～17 時 30 分

場所：共同教育学部 6 号館 102 教室

内容：

１．附属中学校公開研究会に関する授業・研究の解説
（附属中研究主任：柳川）

２．ＦＤ対象事業に参加して（新任教員）
・附属小学校公開研究会
・大学教員による特別授業

３．意見交換

４．その他
次回（第３回研修会）について

今回は，附属中学校研究主任柳川先生より，附属中学校公開研究会に関する授業・研究の解説を行っていただいた。新任教員からは「附属中学校で力を入れている ICT 活用の授業が，主体的・対話的で深い学びの実現に効果的で，ICT 活用のスキルアップが教員に求められていることをより実感しました。それと同時に，全生徒にタブレットを配布する際，使い方の指導だけではなく情報モラル等の指導の重要性も改めて感じました。」や「附属中学の取り組みについての話を詳細に聞くことができて，附属中学が身近に感じられるようになったと思う。また，公開研究会に関する意見交換を通して，普段話す機会が少ない他教科の教員の見方，考え方を知ることができたことも，大変有意義であったと思う。」といった感想が寄せられ，附属学校園における取り組みに対する理解を深める上で，有意義な研修の場を提供できたものと思われる。

また，FD 対象事業である大学教員による特別授業についても，新任教員から参加報告が行われた。終了後には「ICT を活用した授業の利点として，ICT を活用することで，限られた時間の中で個人での作業や意見交流等多彩な活動を取り入れ，授業をスムーズに進めることができること，生徒個々にあった ICT 活用の選択の幅があること」や，「中学校と大学との連携は，教育，研究の面でも重要なことだと考えていますので，今後も大学の先生方の授業がある際にはぜひ参加させていただきたい」といった感想が寄せられた。また，「今後，附属校での特別授業を行う機会があれば，積極的に引き受けたい。」との意思を示してくださった方もおり，附属学校園との連携・協力の重要性を理解していただく良い機会となったと思われる。

③ 第３回

期日：2021 年 12 月 7 日（火）

時間：10 時 20 分～11 時 50 分

場所：共同教育学部 6 号館 105 教室

内容：

１．学部教員による講話

講師　河内　昭浩准教授（国語教育講座）

テーマ　「宇都宮大学との連携について－現状と課題－」

２．教育実習の振り返り（安藤先生）

３．ＦＤ対象事業に参加して（新任教員）

・教育実習（A,C,D,幼稚園）

・附属中学校公開研究会,附属特別支援学校研究会

・附属小学校・提案授業及び授業研究会

・附属学校園での大学教員による授業

４．意見交換

５．その他

・報告書原稿について

・次回（第４回研修会）について

今回は，共同教育学部における宇都宮大学との連携について，カリキュラム委員長の河内准教授よりお話をいただいた。宇都宮大学との共同教育学部に変わることで，より幅広く深い教育内容の授業が可能となることや，教職特別演習などの共同教育学部独自の科目があることなどが確認された。また，今年度初めて行った教職特別演習Ⅰについて，コロナ禍により Zoom でのオンライン開催になってしまったものの，両大学の学生が交流できるよい機会になっていたことなどが紹介された。新任教員からは，「私は斉一科目を担当していないため，宇都宮大学との接点も少なく，『共同』教育学部であることの実態もあまり把握できておりませんでした。…（中略）…今回の研修では，学生が共同教育学部に抱いている感想や，合宿の代わりに行われた宇都宮大学との交流イベントの様子など，学生の様子も含めた形で宇都宮大学との連携について踏み込んだお話を聞くことが出来，大変参考になりました。」といった感想が寄せられた。

④ 第４回

期日：2022 年 2 月 14 日（月）

時間：10 時 20 分～11 時 50 分

場所：共同教育学部 6 号館 105 教室

内容：

１．新任教員による報告（発表）（新任教員 4 名）

２．１年間を振り返って

３．その他

今回は 4 名の新任教員の一年間の活動報告が行われた。川野文行教授からは，附属中学校の副校長，県内学校の校長等をお務めになったご自身の経験と関連付けながら，本学部の教員としての一年間の勤務状況についてご紹介いただいた。大下達也准教授からは，FD 研修会，教育実習の巡回指導，公開授業・特別授業の参観といった FD 活動から学んだことについてご紹介いただいた。佐藤佐織講師からは，ご自身の中学校教員としての経験と関連付けながら，様々な FD 対象事業に参加されて得た学びについてご紹介いただいた。紺谷正樹講師からは，ICT 教育に関わる知見のご紹介をいただくとともに，この一年間の取り組みと今後の見通しについてのお話をいただいた。どの新任教員も，赴任 1 年目から幅広い活動を活発に展開しており，今後ますますの発展が期待される。

Ⅲ. 活動報告

1. FD 活動推進委員会の会議報告

(1) 第１回会議　2021 年 6 月 1 日(火)

時間：11 時 50 分～12 時 20 分（第 1 回新任教員 FD 研修会終了後）

場所：共同教育学部 C108 教室

内容：1. はじめに

2. FD 活動推進委員会に関する規定等

3. 2021 年度 FD 活動推進委員会の構成

4. 2021 年度 FD 活動推進委員会・会議計画

5. 2021 年度事業計画

6. 2021 年度報告書原稿の分担

7. 第 2 回新任教員 FD 研修会の確認

(2) 第２回会議 2021 年 7 月 20 日(火)

時間：17 時 30 分～17 時 50 分（第 2 回新任教員 FD 研修会終了後）

場所：共同教育学部 C102 教室

内容：1. 第 3 回新任教員 FD 研修会内容の確認

(3) 第３回会議 2021 年 12 月 7 日(火)

時間：11 時 50 分～12 時 10 分（第 3 回新任教員 FD 研修会終了後）

場所：共同教育学部 C105 教室

内容：1. 今後の FD 活動推進委員会事業計画

2. FD 活動推進委員会報告書作成の確認

3. 第 4 回新任教員 FD 研修会の確認

(4) 第４回会議 2022 年 2 月 14 日(月)

時間：11 時 50 分～12 時 20 分（第 3 回新任教員 FD 研修会終了後）

場所：共同教育学部 C105 教室

内容：1. 2021 年度事業計画等の反省

2. 2022 年度事業計画等の検討

3. 報告書の最終確認

(5) 第５回会議 2022 年 3 月 14 日(月)～18 日(金)(持ち回り)

内容：1. FD 活動推進委員会報告書の点検・承認

2. 2022 年度 FD 活動推進委員会事業計画(案)の点検

2.　新任教員の活動報告：「今までの経験と新たな学びを生かした教育を」

教職リーダー講座　川野 文行

（1）本学教員として踏まえるべきこと――新任教員 FD 研修会からの学び

「共同教育学部の歴史・組織・特色」,「教育養成の仕組み」,「附属中学校公開研究会に関する授業・研究の解説」,「教育実習の振り返り」,「宇都宮大学との連携」等，群馬大学共同教育学部の教員として職務上踏まえるべきことを学ぶことができた。特に現在，本学は教職大学院への一本化とともに共同教育学部のスタートという大きな転換点にあり，未来に向かって教育の質を高めていかなければならないことを強く感じた。

（2）授業改善と校務改善の両面での ICT 活用――附中中間発表会･公開研究会からの学び

様々な授業において ICT を活用していることを具体的な資料や説明により知ることができた。特に，このアプリを使うと学習活動がこのように変わるということがよく分かった。また，校務の効率化や授業準備についても成果が発表され，ICT 活用により働き方改善を確実に進ませることができることが分かった。授業改善と校務改善の両面で ICT 活用をこれだけ進め，その取組を発信している学校は，全国的にも稀有であると感じた。

また，参加者による質問内容は切実で，群馬県の学校における ICT 活用の現状を把握する上でたいへん参考になった。公立学校での一人一台タブレット導入はスタートしたばかりであり，その一歩先を行く附属中の取組から今後も様々なことを学びたい。

（3）学問的知見と ICT 活用で変わる学び――附中特別授業(河内先生)からの学び

①学問的知見に基づく学習方略により生徒の思考を促して学習効果を高めていたことと，
②一人一台 ipad を生徒が有効に使いこなしていたことの二点から，学問的な知見と ICT の有効活用により生徒の学びが変わることを，直接参観させていただくことができた。

（4）様々な授業スキル，そして，理論と実践の往還――OJT からの学び

私は，同じ講座の５人の先生方とともに授業を担当させていただく中で，大学における 90 分授業のやり方や，ZOOM の設定・画面共有・チャット・ブレイクアウト，教務システム，LMS 等の様々な授業スキルを直接教えていただいた。また，授業打合せを毎回行っていただいた方には，ZOOM のチャットや GoogleForms を用いた授業振り返りと，そのまとめを用いた次時の導入のやり方とそのよさを眼前に示していただいた。そして，何よりも児童生徒の学びについて理論と実践の両面から考えることの必要性を多くの方から教えていただいた。特に，教職リーダーコースの課題研究（ゼミや実習Ⅰ・Ⅱ）指導の中で，院生の課題研究内容が充実していく様を直に感じることができたことは忘れることができない。今後の精進の糧にしなければと考えている。

(5) まとめとして

私は，伊勢崎市立小・中・高等・中等教育学校に１４年間，本学附属中学校に１３年間，伊勢崎市教育委員会に１１年間勤務し，教諭・教頭・副校長・校長，指導主事・係長・課長等として様々な職務に当たってきた。特に，中等教育学校の設置・開校準備等の経験や教育困難校における教員・管理職，群馬県教育研究会の会長・理事・事務局としての経験は，多角的・多面的に学校教育について考察・企画・実践する機会となった。そのような経験と上記(1)～(4)のような新たな学びを生かした教育を，今後，本学において行っていきたい。

3.　新任教員の活動報告：「１年を振り返って」

数学教育講座　大下 達也

(1) 附属学校園との関わり―公開研究会の参加報告

本年度は 2 件，公開研究会に参加した。

① 6 月 25 日 附属小学校(算数)公開研究会の所感

算数科の授業動画（1 年生「かたちづくり」および 2 年生「１００より大きい数」）を事前に視聴して，６月２５日当日は（私自身の担当講義の関係で，短い時間ではあったが）オンライン開催の研究会（算数科）に出席した。大学教員の立場で小学校の授業を参観するのは今回が初めてであり，授業動画を通して非常に多くのものを学べた。その中でも，「児童が図形や数を扱うために必要な感覚を身に着けていくステップ」を断片的にではあるが見ることが出来たことが，自分にとって非常に有意義だったように思う。また，児童たちが自分の頭で考えて，しっかりと自分の意見を述べていることが印象深かった。特に 1 年生は入学してほとんど時間が経っていないにもかかわらず，そういったことが出来るようになっているということに驚いた。今後も，スケジュールが許す限り，積極的に公開研究会に出席して行きたいと思う。

② 10 月 22 日 附属中学校(数学)公開研究会の所感

この授業では，「人が道をまっすぐに歩いた時に，電灯に照らされた影はどのような図形を描くか？」という日常的な問題について考えた。まず，生徒たちに「影が描く図形」を予想してもらい，数学教育用のアプリ GeoGebra を用いて「実験」を行った後，図形の性質に関する既習事項を応用しながら「なぜそのような実験結果になるのか」を考察するという流れで授業が進行した。「影の描く図形が直線になる」という正解を予想していた生徒は全くいなかったので, GeoGebra を用いた実験の後, 生徒たちがわっと驚いたのが印象的だった。

GeoGebra を用いると手軽に，正確に図が描けるので，図を描くことのハードルを大きく下がる。そのため，数学の授業に GeoGebra を導入することには，手軽に「実験」できるようになるという大きな利点がある。特に，「連続的に点を動かす」「立体を様々な視点から正確に描く」等，手で描画することが困難なことも手軽に実現できるため，授業に取り入れることで，（単に「効率が良くなる」だけでなく）これまでに出来なかった多様なアプローチが可能になると期待できる。

しかし一方で，GeoGebra を用いると図が正確に描け過ぎるため，不適切に活用すると GeoGebra による実験が「答え」になってしまって，生徒たちが「自分たちで考えること」の必要性を感じなくなるのではないかという懸念もある。

この授業は様々な点が素晴らしかったが，特に優れていたのは，ここで懸念したことが起

こらないような題材選びと授業構成であると思う。生徒たちが関心をひきやすい身近な題材を扱い，実験によって生徒たちの予想がきれいに裏切られたことで，自然に「なぜ？」という疑問につながり，生徒たちは積極的に深い思考へと向かっていった。また，最終的に既習事項を用いて身近な問題を解決できたことで，数学の授業で学んできたことの有用性をより身近に感じることにもつながったと思う。

(2) 附属学校園との関わり―大学教員による特別授業

本年度は 1 件，附属中学校で特別授業を行った。

3 月 4 日 附属中学校 2 年生 特別授業(数学)「素数について」

また，本年度は 2 件，他の大学教員による附属中学校の特別授業を参観した。

1 月 14 日 附属中学校 3 年生 特別授業(数学)「あみだくじと数学」(伊藤隆教授)参観の所感

あみだくじは代数学の「群論」と深くかかわる身近な題材である。この授業は，「同じあみだくじを何回かつなげると元に戻るでしょうか」という問いから出発して，「実際にあみだくじを書いて試行錯誤してみる」という体験も織り交ぜながら，あみだくじに興味深い数学的な構造が潜んでいることを楽しく学べるように工夫されていた。

あみだくじは，私も機会があれば出前授業等で扱ってみたいと考えていたトピックなので，「実際に中学生に授業するには，どのような点に留意するべきか」「授業をどのような構成で，どのようなペースで実施すると良さそうか」等，様々な点で大いに参考になった。また，小学生・中学生・高校生・大学生を対象に授業をする場合，今回の特別授業の切り口の他に，どのような切り口で「あみだくじ」というトピックを扱うことが出来るのだろうかと改めて考える大変良いきっかけになった。

2 月 10 日 附属中学校 1 年生 特別授業(数学)「オイラーの定理と1対1対応」(石井基裕准教授)参観の所感

オイラーの定理の主張自体の面白さに加えて，この授業で扱った「個数を数えなくても個数が等しいことが分かる」という議論は，中学校の普段の授業では，取り上げられる機会が多くないため，生徒たちに「ものの個数」に対する新たな視点を提供するものになっていたのではないかと思う。このように，この特別授業は，非常に良い題材を扱っており，今後の小・中・高での出前授業における題材選びにおいて，大変参考になった。

この授業では，手を動かして計算して，小さな自然数に対して「オイラーの定理」が成り立っていることを確認する時間を設けることで，オイラーの定理の主張の理解を促すとともに，生徒たちが「定理が成り立っていることのふしぎさ」を体感できるようになっていた。

授業後のアンケートでも，生徒たちはオイラーの定理の主張がよく理解できたと回答しており，手を動かす時間を効果的に設けることの重要性を再確認できた。

（3）専攻横断グループ･宇都宮大学

本年度は宇都宮大学との斉一科目は担当しなかった。1 年生専攻横断については，中村保和准教授（群馬大）と共同でグループ担任を担当した。

次年度は下記を担当する予定である。

- 教職特別演習 I
- 代数学基礎 1（斉一授業） 連絡教員
- 代数学概論（斉一授業） 担当教員

今後の抱負

- 他専攻の教員や宇大の教員たちと協働して，専攻横断グループ G の担任として，教職特別演習 1 等の科目や宇大との交流イベント等に携わり，専攻を超えた学生間の交流や，大学を超えた群大生と宇大生の交流を深めることに努めたい。
- 今後担当することになる斉一科目は，群大生と宇大生，双方にとって実りの多い，「共同」教育学部のメリットが活きるものにしていきたい。特に次を心掛けたい。
  ①自身の専門性を活かした授業づくりを探求する。
  ②学生たちの「声」を拾う工夫をする。

（4）教育実習

本年度は 3 件（A 実習 2 件，B 実習 1 件）の研究授業を参観した。

教育実習についての所感

(A) 実習生に対して指導を行う際に，数学に関する専門的な知見（授業内容に関する個々の知識だけではなく，その分野の理論的な背景を踏まえた視点や考え方なども含めたもの）が非常に役に立った。

(B) (A)に関連して，指導分野に関する深い見識を持つ教員を養成することや，講演等を通して大学教員のもつ専門的な知識を教育現場へと還元することの重要性を再認識することができた。（数学教育講座の取り組み: 数学科研修院）

(C) 研究会での実習生同士の活発な意見交換の様子を見たり，研究室指導学生の教育実習の振り返りを聞いたりすることで，実習生は色々なものを，よく見て学んでいることを知ることが出来た。

(D) 自分が学生だった頃と比べて，教育現場も変化している。教育現場の現在の状況について，もっと知る必要がある。

4.　新任教員の活動報告：「１年間を振り返って」

家政教育講座　佐藤　佐織

（1）はじめに

私は令和２年１０月に本学に採用されるまで，北海道の中学校・高等学校で２０年半に渡り，家庭科と数学の教員をしてきた。教育現場での実践経験，教育実習生の指導経験はあるが，大学での勤務は初めてで附属学校での勤務経験もないため，この１年間参加させていただいた新任教員のＦＤ研修会とＦＤ活動は，今後大学における教育・研究活動をする上で学ぶべき点が多く，貴重な経験となった。ここでは，この１年間の研修の成果を報告する。

（2）研修会に参加して

① 第1回 新任教員FD研修会

第１回の研修会では，共同教育学部の歴史，組織等についてお話をしていただき，共同教育学部設置の背景や群馬大学・宇都宮大学両大学の特色を活かしたシナジー効果について理解することができた。

教員養成の仕組みについては，群馬大学１年生～４年生の４年間で，教育現場との交流を重視した授業・実習が系統的に組まれていることを改めて確認することができた。

附属学校の役割については，附属中学校と大学との連携・共同研究のお話があり，大学教員の専門性が中学校の授業にもたらす効果や役割について理解することができた。

② 第2回 新任教員FD研修会

附属中学校公開研究会に関する授業・研究の解説があり，附属中学校で力を入れているＩＣＴ活用の授業が，主体的・対話的で深い学びの実現に効果的であること，ＩＣＴ活用のスキルアップが教員に求められていることをより実感することができた。それと同時に，全生徒にタブレットを配布する際，使い方の指導だけではなく情報モラル等の指導の重要性を再確認することができた。

ＦＤ対象事業の大学教員による特別授業についても，ＩＣＴを活用した授業の利点としてＩＣＴを活用することによって，限られた時間の中で個人での作業や意見交流等多彩な活動を取り入れてることができること，授業をスムーズに進めることができること，生徒個々にあったＩＣＴ活用の選択の幅があることがあげられた。

③ 第3回 新任教員FD研修会

「宇都宮大学との連携について－現状と課題－」では，群馬大学共同教育学部は，より専門性の高い授業を受けられるだけではなく，群馬大学と宇都宮大学の学生の交流も盛んになり，学生自身もそのことを前向きに捉えていることがわかった。

専攻横断型の授業は，多くの専攻の学生と意見交流をすることで，考え方に偏りがなく，学生の視野を広げることにつながっていると，指導法の授業を通じて実感している。アフターコロナにおいては，コロナ禍だからこそ気づけたこと，コロナ禍ゆえに工夫せざるを得なかったことを継続し，対面授業の良さとオンライン授業の良さを両方取り入れた授業方法を構築していく必要性を感じた。

（3）附属小学校･オンライン公開研究会に参加して

第５学年家庭科「Everyone feels comfortable !−心地よく住まう−」

部屋の換気の仕方，風通しの良い窓の開け方について，部屋の模型とＩＣＴの活用を通して，児童同士が意見交流や情報の共有化を行う授業であった。ここでは，部屋の模型を用いて中に煙を充満させて，どの窓を開けたら煙がよく抜けていくのかを可視化し，煙の流れをタブレットで録画し，空気の流れをペンでなぞる等，教材模型とＩＣＴの活用を組み合わせ，児童に実感を伴った理解をさせる授業の工夫がされていた。

タブレットを用いてグループの意見交流を行い，他者の意見を聞いて自他の良さや改善点を見出したり，他者に影響を与えること，全体での意見共有を図る等，ＩＣＴ活用方法の例示と授業が行われており，今後のＩＣＴを活用した授業づくりの参考になった。

公開研究会では，コロナ禍において換気についての意識は高く，教材模型やＩＣＴの活用により，児童が目で見て納得できること，実感を伴った理解ができるという点において，高い学習効果が得られる等，意見交流が行われた。

（4）学部教員による附属中学校での特別授業を参観して

第３学年国語科「自分の経験や考えを一般化し，説得力のある意見文を書こう」

河内昭浩先生による特別授業を参観させていただいた。ＩＣＴを活用し，作文を書く手順が効果的に示されていた。具体例を複数上げてそれらに共通する特徴を導き出す「一般化」と相手（読み手）を納得させる「説得力」のある作文を書くために必要な材料を，ロイロノートのシンキングルール「ベン図」に列挙し，再度作文を書いてみるという手法は，短時間で相手に伝わりやすい作文を書くのに有効な方法であった。

授業中ＩＣＴ活用の場面が２回あった。１回目はベン図の作成で，この時はＩＣＴを活用している生徒が７割程度，配布プリントに書いている生徒が３割程度だった。２回目は作文を書く時で，タブレットを画面分割（左側に前回書いた作文・右側に今回の作文）し，ベン図と前回の作文を見ながら書く生徒が１割程度，配布された原稿用紙に書いている生徒が９割程度だった。ＩＣＴ活用の有無は生徒に選択権があるため，生徒の活動に自由度があり，自分の適性に応じて作業がスムーズに進められていた。限られた時間を効率よく使うことができるという点においても，ＩＣＴの活用は有効であると再確認することができた。

（5）教育実習Aの授業を参観して

・桃川小学校　６年３組算数　　令和３年９月２１日（火）
・附属小学校　５年２組家庭科　　令和３年９月２４日（金）
・附属小学校　６年３組算数　　令和３年９月２４日（金）
・荒牧小学校　５年２組家庭科　　令和３年９月２９日（水）

○附属小学校の授業では，ＩＣＴと黒板の両方を活用し，児童にわかりやすい図や資料の提示と，児童の発言をわかりやすく整理して提示し，情報共有する工夫が見られた。
○荒牧小学校の授業では，ＩＣＴの活用はなかったが，黒板に掲示したイラスト，図，児童に配布したワークシートを上手く活用して授業を進め，板書整理もしっかりとされていた。授業研究会においては，学生が中心となって司会進行し，活発な意見交流が行われていた。
○教育実習Ａでは，協力校の先生方による学生への手厚いご指導により，学生の授業スキル，教師として社会人としての責任や意識の面で，大きく成長した姿を見ることができた。

附属小学校での教育実習の様子

荒牧小学校での教育実習の様子

（6）おわりに

この１年間の活動を通して，群馬大学が協力校と連携し，いかに教員養成に力を入れてきたのか，小中学校においてもいかに質の高い教育を児童生徒に提供しようと創意工夫してきたのかを，実感することができた。そこで，今後に向けて取り組んでいきたい点を以下にあげたい。

○小中学校では，日々限られた時間の中で，授業をこなすことに追われている。大学と協力校との連携の場面を増やし，教科の本質に結びつく専門的な視点での授業を大学教員が行うことは必要だ。大学の教員として附属小中学校やその他協力校の授業に関わる機会があれば，貢献していきたい。
○群馬大学の特色を活かした教育を提供できるように教育活動・研究に努め，附属小中学校

との連携・共同研究にも関わりをもち，家庭科の授業実践や教材開発について，附属小中学校の協力を得ながら実践していきたい。

○専攻横断型の授業は，多くの専攻の学生がいる良さを活かし，ジグソー法を使ったアクティブ・ラーニングの授業も積極的に取り入れていきたい。
○初等家庭科指導法，中等家庭科指導法の授業の中で，ＩＣＴを活用した授業づくりと教材開発についての内容を充実させていきたい。
○家庭科の調理実習は長期化するコロナ禍の影響で自粛が続いている。ＩＣＴを活用した調理実習の実践について，検討していきたい。

最後に，今後は自分の専門の教科の授業だけではなく，他教科の授業も積極的に参観していきたい。それは，ＩＣＴ活用法やカリキュラム・マネジメントの観点からも，他教科の授業から学ぶべき点は多くあるからだ。

来年度は，これまで学んできたことを活かして，大学院や大学での指導につなげ，群馬県の教育に貢献できる教員の育成に力を入れていきたいと考えている。

5. 新任教員の活動報告：「1 年間を振り返って」

教育実践センター　紺谷 正樹

(1) はじめに

昨年度まで，私は北海道の公立中学校において技術科教育を指導してきた。専門分野はプログラミング教育である。これまでの勤務校では，教科の特性上，ICT 機器の活用ならびに ICT 環境整備の業務を遂行してきた。最近では小学校におけるプログラミング教育の必修化に伴い，出前授業並びに校内研修会の講師として，所属していた管内を奔走した。今年度より，本学においてはこれまでの経験と知識を生かすべく ICT に関する業務を担当している。

新任教員としてこの 1 年間を振り返ったとき，まず頭に浮かんできたことは本学の先生方の学生ならびに大学院生に対する熱量の高さである。私は教育実践センター所属ということもあり，教育実習に関する事前指導，実習中の指導，そして事後指導に関わってきた。それぞれの講義に関して教壇に立っている先生方が群馬県の教育を担う学生に対して，教員としてのやりがいや社会的責任の重さなどを丁寧に伝えていた。その結果，それに応えるように実習校アンケートの評価は非常に高い。大学 1 年次から 4 年次まで一貫した「学部・学校現場往還型カリキュラム」を標榜している本学の大きな特色が機能している結果と考える。

また，2022 年 1 月に本センターが実施したシンポジウムの企画及び運営に関わる中で，強く感じたことは，地域の教育機関との連携の高さである。ちなみにシンポジウムの参加申し込み数は 200 名を超えた。これまでの本学との関わりの結晶と考える。さらに，本センターでは 3 月に新採用教員を対象として研修会を企画している。こうした取り組みは他県の教員養成系の大学では非常に珍しいものであり，群馬県の教育水準の高さに寄与している。こうした教員を目指す学生の実地的・実践的な教育から，現職教員の資質能力の向上，今日的教育課題の解決のサポートまでを担っている本学で働けることにやりがいを感じており，群馬大学の教員であることが私の誇りである。

(2) 活動報告

① 2021 年 5 月 6 日 授業実践開発コース 濱田コース長の講話

「アクションリサーチ」についての講話であった。「アクションリサーチ」とは一般的に授業で何かの問題に気づいたら，実態の把握と原因の究明に努め，対策を講じて実践し，結果を検証して解決を目指す授業改善の方法のひとつである。理論からでなく，現場の問題意識から発想するこの手法は，大変効果的であるとされている。濱田コース長のこれまでの研究を交えながらのレクチャーであり，非常に参考になるものであった。

私は前述したように，技術科の教員であった。技術科の指導内容において，特に情報教育に関する内容は指導要領改訂のたびに新しくなった。現行の学習指導要領を例にとると「デ

ジタル作品の設計・制作」が「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題の解決」になった。端的に言えば，既存のアプリケーションソフトウェアを活用する利用教育から，新しい価値を生みためにプログラミング活動を保障した創造教育へ切り替わった。昨年度までの移行期の 3 年間，私はある意味「アクションリサーチ」を行ってきた。私が所属する管内では技術科の免許所有者が 3 割にも満たないため，ほとんど交流を深めることができなかった。しかし，後述する附属中学校の公開研究会において，技術科担当教諭である茂木氏がその単元を公開してくれた。今後，お互いの実践交流を深めていきたいと切に願っている。また，この新しい内容での公開研は非常に勇気のいることであったと想像できる。移行期において，数々の実践・検証が自信となり，公開できる状態になったと予想できる。まさしくアクションリサーチを体現化した附属中学校の教育水準の高さを目の当たりにした。

GIGA スクール構想は世界的なコロナ禍の影響により，当初の計画を前倒し，2021 年度内において全小中学校に 1 人 1 台端末が整備された。当初の予定では小学校・中学校ともに 3 年間かけて，丁寧な議論を重ねることを想定した整備予定であった。しかし，その議論は拙速になることを余儀なくされた。そのため，教育現場は収まらないコロナ禍に対峙しながらの ICT 機器の活用と ICT 環境の整備に追われている。今年度，私は教育現場での ICT 機器の活用に関する研修会での講演の機会を数回いただいた。その際，「アクションリサーチ」の理念を繰り返し説明させていただいた。研修会の冒頭，教育産業では「ICT 教育」の必要性を喧伝しているが，文科省は一度も「ICT 教育」という語句を用いていないということを説明させていただいた。文科省は「ICT 活用」・「ICT 環境の整備」を多く用いている。ここで強調したいことは「ICT」という語句は教育界では，教育内容ではなく教育方法に分類されるということである。その教育方法に関しては「アクションリサーチ」の理念がとても馴染む。つまり，ICT 機器に関する実態把握・実践検証の積み重ねが肝要である。教育現場では，ややもすれば「ネットワーク環境が脆弱であるから ICT 機器を使うことに不安が募り，利用回数が少なく，利用場面も限定的になってしまう。」「児童生徒の個人間スキルの差が激しいため，授業進度に影響が出てしまうことが怖い」など，ICT 機器に対して，白物家電のような不具合が生じない状態を利用条件にしていることが少なくない。私の経験上，その不安は杞憂に過ぎないと感じている。生まれながらにデジタル機器に囲まれ，物心ついたときにはネットワークを介したゲームを体験してきた児童・生徒は，教員が想像する以上に新しいモノに慣れ親しむことに長けているからである。こうした状況を打破する意味でも「アクションリサーチ」の概念は非常に重要な教員の資質能力の育成に資する。

② 2021 年 6 月 1 日 第 1 回新任教員研修会

藤森学部長より共同教育学部の歴史，組織，特色の説明があった。安藤氏より新任教員 FD 研修の概要の説明があった。関副校長より附属学校の役割について説明があった。最後に安藤氏より教員養成のしくみについての説明があった。大学教員という自覚と責任を改めて

認識した。まさしく身の引き締まる思いであった。

とりわけ，関副校長の講話は群馬県の教育水準の高さを保障するこれまでの連綿たる附属中における理論と実践に関するものであった。この研修会の前に附属中の校長である本センター職員の上原教授のご厚意により，附属中の普段の授業を見学させていただいた。

まず，驚いたのは全学年の生徒がタブレット端末を「文房具（鉛筆やノートのようなアナログ的な道具としての意）」として活用しているという点である。その入力方法を例に取ると，ペン入力，キーボード入力，時には静止画撮影による入力など，それぞれの生徒が TPO に応じて，その入力方法を選択できる能力が身についているという点である。「主体的」に ICT 機器を活用していた。さらに，話し合いの場面では，オンラインホワイトボードでデジタル付箋紙を有効に活用し，それぞれの意見を広げたり・まとめたりしていた。「対話的」に情報端末機器を利用していた。しかし，この対話的な活動が活発化しているのは，いうまでもなく，これまでの附属中での教育方法の研究の成果の上に成り立っており，その研究土壌の元に ICT 機器の有効性が大輪の花を咲かせている素晴らしい教育実践の表れであった。

一般的にデジタルツールの利用上の注意喚起は，「手段の目的化」という一語に集約される。すなわち，それを使うことが目的化してしまうことである。あくまでも，デジタルツールの利用目的は「深い学び」につなげることである。極端に言えば，デジタルツールの利用は「主体的・対話的で深い学び」の触媒にしかすぎないということである。つまり，生徒の変容を化学変化に例えれば，その化学反応の速度を速める効果が触媒であり，その触媒自体は変化しないというものである。附属中の実践はさりげなくデジタルツールを活用している触媒的デジタルツールの活用と言えよう。

さらに，附属中学校の素晴らしい点はその教育方法を惜しむことなく，教育現場に提供していることである。附属中学校では，群馬県内の小中学校に対して，定期的に ICT 機器の活用に関する研修会を開催している。しかも，附属中の研修会としては珍しく，附属中のデジタルツール活用の黎明期からどのように校内で活用事例を増やしていったかという入り口の紹介に始まり，研修会参加者の素朴な質問に答えるという形態に終始している。

③ 2021 年 6 月 25 日 附属小学校公開研究会（オンライン）

第 4 学年理科の「プロペラを早く回すには電池のつなぎ方をどのようにしたらよいか」を視聴した。各班の実験結果をもとに，デジタルツールを用いて交流し，そのデータから「早く電池を回す」という目的を実現する回路を具現化するものであった。

特筆すべきは，大型テレビに対する生徒の視点の移動の習慣化である。タブレット端末を用いた授業は，その利用回数ならびに利用時間の設定をあやふやにしてしまうと，児童はずっとタブレット端末に向かってしまうことがある。教師が「黒板をみてください」といっても，タブレット端末の入力に夢中になってしまい，教師の説明を聞き逃すことがある。タブレット端末の利用を制限することにより，強制的に視点を移動させるのではなく，教師の説明が始まると，すっと，児童は黒板や大型テレビを見るという学習規律が徹底していた。デ

ジタルツールの活用における学習規律の確立は重要なポイントである。今も昔もこれからも，一度顔を上げて，黒板をしっかり見て，先生の説明を頷きながら聞くという学習行為は，その理解度の定着に有効であることに疑念を抱かない。

④ 2021年7月20日第2回新任教員研修会

附属中学校の研究主任より，附属中学校公開研究会に関する授業・研究の解説があった。研究主題は『自ら問題を解決し，未来を創る生徒の育成（最終年次）－「見方・考え方」をを働かせる問題解決の過程を通して－』である。この研究主題は，中教審答申（2016）が提示した「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「なにができるようになるのか」のうち「どのように学ぶか」を焦点化したものであり，学力の要素である「思考力，判断力，表現力等」の資質・能力の育成につながるものである。さらに，特筆すべき点は最終年次の課題として，これまで培ってきた各教科等の問題解決の過程の修正を図るともに，「学びの質」をたかめる手立てとして，ICT活用を位置づけたことである。

いま，教育産業は「AIドリル等」の記憶再生型学力の向上を目指したサービスを展開している。公立中学校においても，授業の合間を縫ってAIドリルを利用している例が報告されている。しかし，短期的に学習記憶が向上しても「深い学び」にはつながっていないはずである。公立学校でも，附属中のように「学びの質」を高めるためにICT機器の活用を願わずにはいられない。

また，昨今コロナ禍による休校等の対応に際し，タブレット端末の持ち帰りの是非について，議論が盛んである。確かに，家庭学習のきっかけになるのかもしれないが，それ以上に保護者が指摘する「インターネットサーフィンに興じる」という負の側面を拭い去ることはできない。よって，盲目的に「これまでのドリルと違いAIドリルだから，教師が誤答をチェックできるから」だけで，持ち帰りを許可するのは拙速な結論である。一般的に学習習慣が確立している児童生徒に対してAIドリルは有効な可能性が高い。しかし，今も昔も，家庭学習習慣の確立までの必要条件は保護者が寄り添うことが重要である。決して，タブレット端末に素晴らしい問題が用意されているだけで，家庭学習の習慣が確立されるとはいいきれない。この家庭学習の習慣の確立に対してこそ「個別最適な学び」の議論が大事であり，短絡的なAIドリルだけの提供にとどまらず，多種多様なデジタルコンテンツを提供することによる新しい家庭学習による教育効果も議論の必要がある。

⑤ 令和３年10月8日 附属中学校公開研究会（オンライン）

３年技術科「よりよい生活や社会を創る双方向性のあるコンテンツ」を視聴した。その後，授業者より謙虚な研究報告があった。技術科教育に関する唯一の学術団体である日本産業技術教育学会に長年所属している私からすると，「全国で１番の実践をしているんだ」という自負と，ぜひその素晴らしい研究成果を世に問う姿勢の醸成を目指していただきたいと切に感じた。とりわけ，今回の学習指導要領改訂に伴った話題の中心は，プログラミングに

よる問題解決であるが，その問題解決のための設計段階において，統一モデリング言語の一種であるアクティビティ図の指導が例示された。そもそも，プログラミング活動における設計図は流れ図（フローチャート）の指導が主流であったが，昨今のプログラミングの開発環境では並列処理が主流であり，流れ図では書きづらかった。その対応としてアクティビティ図が紹介された。この聞き慣れないアクティビティ図を附属中の生徒は思考の整理のために使いこなしていた。茂木先生の教材研究の精度の高さを感じた。

本時の学習課題である「双方向性のあるコンテンツ」という言葉の源流は JIS 規格用語の「動的コンテンツ」である。学習指導要領のワーキンググループのとりまとめでは当初「動的コンテンツのプログラムによる問題解決」であった。しかし，紆余曲折を経てわかったようでわからない「双方向性のあるコンテンツ」と名称を変えた。つまり，この語句として大事な理解は「コンテンツ」にプログラムが仕組まれている。そのプログラムを問題解決のために改変できる活動を保障すると言うことである。この点に関しても，茂木先生は生徒にその真意を分かりやすく伝えており，生徒は概念的な知識の理解を得ていた。

（3）本学の ICT 環境の整備状況の報告（おわりにかえて）

2022 年 1 月の教授会で承認された教務委員会 DX 部会の前身となる組織（メンバー：佐野教務委員長・技術教育講座片柳氏・紺谷）における今年度の活動報告をさせていただく。

① ゲートウェイボックスの対応

前期において，宇都宮大学の教室と本学のオンライン環境を接続するゲートウェイボックスの不具合の対応に終始していた。試行錯誤していく中で，後半からはテレビ会議システムの「H.323 通信」を多用することが増えた。

② アクティブラーニング教室（C105 教室）の ICT 環境

可搬式の机と椅子が 60 セットと縦置き（畳 1 枚ぐらいの大きさ）の移動式ホワイトボード 10 台が常設してある。特筆すべきは，図 1 に示した移動式ディスプレイ 10 台の設置である。学生のそれぞれの PC 端末（OS に依存しない）を最大 4 台，簡単なコマンドで無線接続することができる。グループ学習を実施するのに最適な環境となっている。

③ A106 教室（動画配信教室）の ICT 環境

本センターの待合室であった A106 教室を図 2 のように動画配信専用教室とした。PC 内蔵の小型カメラの代わりに「ビデオカメラ・一眼レフカメラ・書画カメラ・DVD 再生デッキ」を同時接続できる装置を取り付け，様々なライブ映像を提供できる。

図 1　BYOD4 台同時無線接続（C105 教室）

図 2　動画配信専用教室（A106 教室）

6. FD 発表の報告：学部教員による講話
「宇都宮大学との連携について－現状と課題－」

共同教育学部カリキュラム委員長　河内 昭浩

カリキュラム委員会は，これまで宇都宮大学との「共同」の諸事全般に係る時限付きの委員会でした。しかし令和 3 年 9 月の規定の改正により，その名の通りカリキュラムの策定，点検，改善に係る常置の委員会となりました。以下ご報告は，旧来の職務に関することも含みますことをご承知おきください。

(1)共同教育学部設立の背景について

本学部は，全国初の「共同教育学部」になります。これは，「共同学部」が全国初であるという意味ではありません。平成 21 年 3 月の大学設置基準の改正を受け，平成 24 年にはすでに，山口大学と鹿児島大学との共同獣医学部が設立されています。

また，これは「共同」ではなく「連携」ですが，京都，大阪，奈良の三教育大学による「京阪奈三教育大学推進事業」も，平成 24 年に開始され，教育学部における，遠隔による相互の授業提供が行われてきています。またさらに，令和 4 年度からは，金沢大学と富山大学の共同教育課程が開始されることになっています。

その他，大学，学部，学科さまざまな単位での連携，共同が全国で始まっており，そして今も模索されています。小・中・高等学校における統廃合は周知のとおりです。小学校は，平成の期間に，全国で約 5000 校減少しています。そして言うまでもなく，児童生徒の減少・学校数の減少は，そのまま教員需要の減少につながります。

大学も，また教員養成学部も，そうした変化の渦中にあります。「全国初」とはいえ，本共同教育学部も，そうした全国的な変革・再編の一端であるということを，まずはご理解頂きたいと思います。

(2)カリキュラムの特色について

共同教育学部では，それぞれの大学から 31 単位以上の授業を，相手大学の学生に提供するように定められています。本共同教育学部での両大学合わせての相互授業は，62 単位ぶんです。卒業必修単位（155 単位）の約 4 割となっています。

また，次代を担う教員の育成のため，かつ両大学の特性を生かした授業として，forefront 科目群が，新たに設置されています。宇都宮大学からは「環境教育」「ESD 教育法」など，群馬大学からは「ICT 教育の授業設計」「プログラミング教育法」などの授業が提供されます。特に，群馬大学から提供される ICT 関連の授業は，文部科学省の「GIGA スクール構想」の加速と相俟って，その意義は一層高まったと言えるでしょう。

また別に，日頃は離れたキャンパスで学ぶ学生同士の交流の場として，「教職特別演習」

という科目も新設されました。２年次全員必修の「教職特別演習Ⅰ」は，群馬大学主催で，両大の学生が「専攻横断グループ」ごとに，国立赤城青少年交流の家にて学び合う予定でした。しかしコロナ禍のため，令和３年度はオンライン（Zoom）での実施となりました。学びの内容は，附属小学校の道徳の授業（録画）の参観，と授業検討，また別に，それぞれ映像作成等による「群馬・栃木紹介」，また教育実習に向けての話し合いなどでした。

オンラインでしたが，学生同士，積極的に学び合っていました。授業後のアンケートも満足度が高い結果が出ました。我々が思う以上に，学生たちは相手大学との交流の機会を欲しています。今後は通常の授業の中でも，より交流し合えるような授業改善を図れればと考えています。

なお３年次には、「教職特別演習Ⅱ」が，宇都宮大学で行われます。こちらは，専攻・分野ごとの学び合いとなる予定です。

(3)現状と課題について

異なる大学間の一つの学部であるという難しさが，初年度以降続いています。両県の感染状況の違い，両大の全学方針の違い，そして異なるシステムの導入などが折り重なり，両大生が同じ環境で学修する機会を保障することが難しい状況が続いています。斉一授業アンケートにも，相手大学生との受講形態の違いについての不満が多く記されています。また前述の通り，学生は相手大学生との交流を望んでいます。難しい状況が続きますが，少しでも学生の希望をかなえられるように，努力をしていきたいと思います。

ほかにも，施設設備の維持管理や教務システムの問題についてなど，解決できていない問題が複数残されています。走りながらの対応になりますが，共同教育学部の完成年度までには，いずれも解決させたいと思います。

また別に，今年度は，教員免許法施行規則の改正に伴うカリキュラムやシラバスの改編といった作業にも追われています。冒頭でも述べましたように，大きな変革・再編は今も続いています。

またさらに，共同教育学部として，附属校同士の交流・共同もさらに深まっていくものと期待されます。教育実践センターの皆さまのお力により一層お頼り申し上げることになるかと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。

共同であれオンラインであれ，大事なことは，教員としての学生の資質・能力の向上，そのための授業の質の向上にほかなりません。困難な状況の中でも，工夫して，教員と学生の，また，両大の学生同士のコミュニケーションを成立させている授業もあります。そのような授業に関する情報を共有して，斉一授業の質の向上に努めていきたいと思います。

以上が私の報告となります。

共同教育学部完成年度前，しかもコロナ禍で，さまざまご迷惑をおかけしていることと思います。今後とも引き続きご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

Ⅳ．編集後記

「FD を通して大学教員と附属学校園が連携することの意義」

副委員長　関　悟

2021 年４月１日，共同教育学部附属中学校へ副校長として着任しました。そして，このときに「FD の担当だ」と言われました。

「FD」の意味が分からなかったので確認したところ，FD センター（学部・附属学校連携室教員養成 FD センター）というものがあり，「学部と附属学校が連携して組織的な研修を実施し，教員養成に携わる教員としての自覚を涵養し，教育・研究指導能力の向上を図る」ことを目的としているとのことでした。

そこで，教員養成に携わる教員が附属学校園と連携を図ることの意義について，大学教員の先生方にとっての必要性という視点から，述べたいと思います。

大学教員も研究者ですから，当然のことながら「研究」を生業としています。研究は勉強とは違いますので，研究として成立するための要件があります。私は，二つの要件があると考えます。

一つ目の要件は，「オリジナリティがあること」です。

学校現場の実態をつかんでおくことは，オリジナリティのある研究を生み出す上で効果的であると考えます。自身の研究領域に関する新たな知見が，学校の実態を踏まえた理論に沿って展開されることは，一般論に終わることのないオリジナリティ溢れる研究になると考えます。

二つ目の要件は，「認知されるものであること」です。

学校現場の実態に基づいていることは，疑義が生じることのない認知される研究とする上で効果的であると考えます。自身の研究領域に関する新たな知見が，学校の実態を踏まえた理論に沿って展開されることで，説得力を十分に有している認知される研究になると考えます。

申し上げるまでもなく，研究とは自身や他者がその研究領域に関する先行研究の上に新たな知見を一つ一つ積み上げていくものです。学校現場は，これまで積み上げられた先行研究の成果の上にあるものであり，先行研究の検討を行う上でも学校現場を確認しておくことは重要であると考えます。

現在は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から活動が制限されることが少なからずあり，教員養成 FD 活動の推進という側面においても，例外ではありません。しかしながら，このような中でも工夫すればできる活動があります。そして，このような中だから行わなければならない活動もあると思います。目の前の課題に立ち向かうことこそが，研究だと考えます。

山積する多様な教育課題に立ち向かうべく，先行研究の上に立ち，オリジナリティに溢れ，

認知される研究を進めるために，大学教員と附属学校園は強く結び付かなければならず，その場としてFDの意義があると考えます。

今後も大学教員と附属学校園が連携し，更には大学教員と附属学校園が一体となって FD 活動に取り組んでいきたいと思います。

結びに，本年度の教員養成FD活動推進委員会の活動にご尽力いただいた安藤哲也委員長をはじめとする推進委員の皆様，事務担当の品川仁美さんに心より感謝申し上げます。

報告書の作成担当者

共同教育学部 教授（教育実践センター）	安藤　哲也（編集責任者）
附属中学校 副校長	関　　悟
附属中学校 教頭	木村謙太郎
共同教育学部 教授（教育実践センター）	吉田　浩之
共同教育学部 准教授（音楽教育講座）	菅生　千穂
共同教育学部 講師（技術教育講座）	小熊　良一
共同教育学部 講師（数学教育講座）	小泉　健輔
共同教育学部 講師（保健体育講座）	島　　孟留
共同教育学部 講師（教育実践センター）	紺谷　正樹

群馬大学共同教育学部 学部･附属学校連携室

教員養成 FD 活動推進委員会 報告書

2022 年 3 月

発行　群馬大学共同教育学部　学部・附属学校連携室
教員養成 FD 活動推進委員会
群馬県前橋市荒牧町四丁目 2 番地
電話（直通）　027-220-7385（事務局）
ＦＡＸ　027-220-7381（事務局）